八代集抄

古今秋上下冬

三

特別
イ4
3163
104(3)

早稲田文庫

秋来ぬとめには
秋は形なけれはまさ
しく目にはさたかに見えね
とも吹来る風の音
にこそ驚かるゝと
也一説御読さやかには清
也明也さやかは濁 秋
萩をしからみふせて
鳴鹿のめには見えねと
音のさやけさ同之
顕昭説にさやかにお
さやかにと字を略して
云りさやかにと云語を
さやかとよみたるを
定家はさやかなる大

古今和歌集巻第四

秋哥上

秋立日よめる　藤原敏行朝臣（冨士丸子従四位上）（右中将 大内記）

秋きぬとめにはさやかに見えねとも
風のおとにそおとろかれぬる

秋立日うへ（殿上）のをのことも賀茂の
かはらに川せうえう（河逍遥 川あそひ）しけるともに
まかりてよめる　つらゆき

河かせのすゝしくもあるかうちよする
波とゝもにや秋はたつらん

貴
14
3163
104(3)

略ハ周倏忽とさやかりといふ義也清字彙も明也さやかに鮮也
かりせ乃深しくと侍り　波とくもりや秋ハさらさらん行風の深きと
也風りハ波乃上行物なれハ秋乃行かりよせくといふ
わかせこか衣のすそをと　よみ人しらす
秋乃初風のふきて　題しらす
きゝしらん今そ我　わかせこか衣乃すそをふきかへし
せこか衣のすそを　うらめつらしき秋乃初風
吹かへさせくらめ　きのふこそさなへとりしかいつのまに
つらしきと侍けれ　いなはそよきて秋かせのふく
（顕注）我せこ文書に通て
男せ奇ハ兄弟をいふ
男乃衣のすそをと
吹かへしといふ也す（密勘）定家云我背子我妹子文書通用也
端乃よし在中まゝうらめつらしとハいつまの間にかひらくう
切りしとよむ同すく（万葉十二）ゆきこかる例よねる母のこまてハ

うらめつらしくんはおもひわすれも（万）我せこかりえせんといひし梅さらう
由ゝもえなき雲のかよひハ一様御説うらめつらしきさう始つき
同しうらハ心をいふ（源氏）母人も誰をとふとろ大路のうら悲しけよこゑ
乃きこゆる
きみ乃ふところかへりしか　早苗とりしハきのふてあつまハいつのまにり
稲葉も風ありく秋風のふくよふそこ也ハ時節のうつりやすきを云
（顕注）何すらくハわかきなみのにすさとゆの原ハいつやくめる云ふ
早乃こゝろもまの（密勘）早苗とりし夏乃末よてまさるゝよまくハいつよめき
てそハさえもそうもいへ本何りうらむきくをを程暑きてか（先上顕注）云任云家
を九品乃うちらの下にいれくすさて云ひらる本何らすかとぞわ
秋風乃吹ハ日よわ　秋風乃吹にし日よりひさかたの
一度り上座何に織　あまのかはらにたゝぬ日ハなし
女かれハ無限ハ定
マよれと持てもく
秋の風吹日より天　ひさかたのてのかはらに此海とわ

河原にて在同兄　きみわたりなはかちかくしてよ
あとこそ万葉に秋　あまの川もみちを橋にわたせはや
風乃吹にし日より天　たなはたつめの秋をしもまつ
河瀬に出立て待と
つけこせと詠る也　こひ〳〵てあふ夜ハこよひ天川
ひさかたのあまの河原　きりたちわたりあけすもあらなん
舟ハ梶ヲ肝要の物な
れハ渡守君渡り
なハ梶をかくしをけとふ心ハ人目も忍ひとよまれたる歟
あまの川もみちを橋て川に紅葉を橋にわたすハ七夕のための秋
をまつハとうきひよりわたらめハ意也（承治）崇徳院御本にハ橋ゆくと
わたれるとあまて舟とてれより但實方集に天川かよふ
浮木にあるすとりん紅葉の橋ハちるやちりてすや是紅葉の紅葉
と橋もとなる本より付く詠すると見てまかこいつると定家
て舟橋只両説也舟も橋も風情のよからん時に詠へしとそや

と云も是と密勘　又河かみをたつねさせしむるハ漢武帝張騫して
天河乃みな上を見せられけるに浮木にのりて天川に至る
り織女ありあひとしひとゝいふるに七夕なる猶
乃石をとらせけりさてかへりけりそのよしを奏しけるに帝信せさりし
旅上り石をみせられけるを東方朔見てこれハ織女の支機の
石ハまさしく天上へゆけりとて帝信し給ひて浮木ハ昔張騫か乗
乃橋のうへをとりんといふ實方乃哥も實に紅葉を橋に渡
るやうにハ詠ると見えす
こひ〳〵て逢夜ハこよひ　意ハ久しく今夜逢ハ天乃河霧立渡り
夜乃明すもあらなんと

寛平御時なぬかの夜うへに
さふらふをのことも哥たてまつれと仰
られける時人にかはりてよめる
とものり

天川あさ瀬しら波たどりつゝ
わたりはてねば明けぞしにける

おなじ御時きさいの宮の歌合
のうた　藤原興風

ちぎりけん心ぞつらき七夕の
年にひとたびあふはあふかは

天川あさ瀬しら波きと急てうちハわたりれとゝきたにあかぬ心ちかく浅瀬をとを夜の明果ねハ逢瀬の明ぬるとよめり浅瀬しら波ハ浅き瀬の白波を渡んとする迄年に一夜を待得て浅瀬をたとりて渡りも果す夜乃明ハかへるさき年ちらん伊勢大輔の月重乃本まハわたりそめつまむとかきてまとく陰涙を流かそてねハとふ詞をうけをわたりつまハ只あふねハ同事之織女乃哥ハ鵲乃橋よりわたり彦ハ岸瀬をわたりむかへ舟のかすとよまく風情ちまりするなこ明ちまてるる明ちまれるんみとセハ詠すへらす

ちぎりけん心ぞつらき　織女乃こゝろ一よひと契り定ける心ぞつらきこと一よひ行ハあふはあふともなき物なれく

なぬか乃日乃夜よめる
凡河内躬恒

年ごとにあふとハすれど七夕の
ぬるよのかずぞすくなかりける

七夕にかしつる糸のうちはへて
年の緒をながくこひやわたらん

年ごとにあふとハ必年ごとに織女を待へと一夜ハ人すのすくなきと七夕にかしつる糸乃七夕にかしつる糸をえへく年ならく敢かすを我乞わようまとそそ乞巧とて糸をこれとハいふすれハ乞巧奠といへり初学記云女子以五色縷貫金銀針献牽牛織女これを乞巧といふなりこれをねがひの糸とも乞巧奠行乃竿をとりて糸をかけゝく

ねかふをいひけるを七月乃夜さらしく乃わさと七夕まつりをするなり
今も内裏にも乞巧奠（デン）に机（ツクヱ）乃上に箏（シヤウノコト）火をともしそなへて也
（五色）うちそへてハ新近と云物をそへくとなし年のをハ年緒（ネンシヨ）心
緒別（ベツ）緒愁（シウ）緒なとにて只年とゆかすに緒（シヨ）をそへてなり
こよひこん人にハあはし
織女乃一年待しを
乃久しくまたれハ今宵
来る人にあはしと
そのうらみまさると
こん人にハあはして
此哥口訣あり
いまはとてわかるゝ時
今ハと別る時ハ天河
を渡ぬに袖のぬる
ゝと也

題しらす　そせい

こよひこん人にハあはしたなはたの
ひさしきほとにまちもこそすれ

なぬかの夜のあかつきによめる

源むねゆき

いまはとてわかるゝときハ天乃川
わたらぬさきに袖そひちぬる

けふよりハいまこん年
のきのふハ又いつならん
ると待わたる哥ハ定
れる日なれハ明年の
昨日を待へきとなり
此哥師傳口訣
木乃まよりもりくる
木のまよりかゝやかね
くる月影をみれ
ハ心つくしなる秋そと
来にけりと云り
心つくしの秋ハきよりかりハ木葉ちりくれ乃初月此心つくしの（此説二つ有）
何とす筑乃國をよせてとあり（俊成安家説）おほろなる月と云る本
月かつらとハ出入月也わるゝもとえはしめてしあります
月まかきまするとみそのよしもくらす　そこ能案物

やうかの日よめる

みふのたゝみね

けふよりハいまこん年のきのふをそ
いつしかとのみまちわたるへき

題しらす　よみ人しらす

木乃まよりもりくる月乃影見れハ
心つくしの秋ハ来にけり

大かたの秋くるからは
大形乃秋のくるより
身にし我身を歎き
物と思ひ知とし大
かたハ十乃物七八分
乃ものを云 口訣
わがためにくる秋
我ためにくる秋にも
あらねど虫乃聲する
を聞ハ物悲しきと也
物ごとに秋ぞかなしき
紅葉しもてゆく
うつろふを限りと云
そ物ごとに秋の悲しきはするこゝろ也 氣ヲ勞ルヲといふ心 口訣
ひとりぬる床ハ草葉ならぬ 独寝乃床ハ草葉ならねども秋の来る宵

大かたの秋くるからにわが身こそ
かなしきものとおもひしりぬれ
わがためにくる秋にしもあらなくに
むしの音きけばまづぞかなしき
物ごとに秋ぞかなしきもみぢつゝ
うつろひゆくをかぎりと思へば
ひとりぬる床は草葉にあらねども
秋くるよひは露けかりけり

露けきと秋の感
とよめり
是貞乃親王 仁和帝
二宮中將 母同寛平ニ
いつはとは時ハわかねと
いつとハ時をわかねと
秋の夜ぞもつて物
思ふ乃限りなると
ぞしも秋の感をよ
めりいつとハいつといふ
かんなりのつぼ
内裏 襲芳舎（ジフハウシヤ）之
神鳴（カミナリ）之時ニ上此壺
出居なり
かくばかりをしと思ふ 秋の夜を惜む人の惜まぬ人をさする心

これさだのみこの家の歌合のうた
いつはとは時はわかねど秋の夜ぞ
ものおもふことのかぎりなりける
かんなりの壺に人々あつまりて
秋乃夜おしむこゝろよみける
ついてによめる　みつね
かくばかりをしと思ふ夜をいたづらに
ねてあかすらん人さへぞうき

しら雲にはねうち
秋乃夜の月の哥
かゝりて白雲に翔をなし
つく飛雁乃数さへ見ん
ゆるとは前に数さへ
数さへいらぬ句也
又二首乃哥ありしふ

題しらず　よみ人しらず

しら雲にはねうちかはしとふかりの
かすさへ見ゆる秋乃よの月

さよ中と夜はふけぬらし雁かねの
きこゆるそらに月わたる見ゆ

明月むかふ時雁乃
新古今集を本意とすとしたるまふとに雁乃数さへしらすみえんこそ月乃さやけき心ありてこそ一首これは古説ありてはよく数さへを見ゆもと偏案ゆとし故六条左京兆（サキヤウデウ）のよひしは世に山戸亀田集（ヤマトカメタ）とて今の諸乃一座の會に好みられ秋虫月とは云題まして出せるよしとり秋の夜の月とは古き事を古ちて一門は新古へとゆるきよみ一門は数さへ見ゆるとも上りて上るには（ぎぎ）おそれ侍是は左右より数さへを書せりと云ひくいれすまや勝負は人乃（ウタ）心よりすなはちところ出世の朗詠に注りはこの哥乃作をみえてよりて亀田集

是ハ伊衡（コレヒラ）か詠しを友則　信表しを難せられしく墓優乃ケゑしよるは数乃心ひかるゝを見て作りしは古質を各別にうつるを見ておもうの手は詞のつゝけし一様所説をもすへてを重するさよ中と夜はふけ　月乃中天をわたるを見て雁かね乃きこゆるは小夜中と夜は更ぬるとの月わたるといふ所唐舎をよそにわたる月とはいふは続古乃月のうた也

是貞乃みこの家の哥合によめる

大江千里

月みれはちゝに物こそかなしけれ
わか身ひとつの秋にはあらねと

月みれはちゝに物
月は陰氣なれは升
極れは必す衰へす
すめてをくにも物悲し
それは我身一つの秋
にあらぬと我身一つの
秋にはあらねと云
秋來只爲一人長と
久かたの月の桂も

たゝみね

久かたの月のかつらも秋はなを

月乃桂も紅葉す
る由にて照まさる
と也此哥を後撰は
貫之家の春宮帯刀
引よ久堅の月
乃桂も花や咲らん
とあり月の桂はまさ
咲秋は紅葉すとみえ
えたるは唐詩に
桂花秋白と雅る
秋花咲とも見えさる
と眼いへると実家
に云桂花は月乃
名也桂の花には
おもむきの常の花に紫なきすくなくまかり哥ならはさすも

もみちすれはやてりまさるらん

月をよめる　在原元方

秋乃夜の月のひかりしあかけれは
くらふのやまもこえぬへらなり

人乃もとにまかれりける夜
きり〱すのなきけるをきゝてよ
める

藤原たゝふさ（忠房　信濃掾是則子　[illegible]）

きり〱すいたくなゝきそ秋の夜の
なかきおもひはわれそまされる

かゝねすなしとひあてともよく作るめり　躬恒家勘
秋乃夜の月の光り　月乃かゝやきハ暗部乃山も越ゆとす
こゆへきと云ひかりし乃しハやすめ字也優なるしとあり
きりぎりすいたくな鳴そ　蛬乃わか身ひとりとおもひてやいたくな
なきそ秋の長き夜をなかきおもひハ我こそまされと云
秋の夜の明るも知す
我ことく物や悲
かるらん　あき夜の
明るも知す鳴虫の
ことく我心もかなし
はかなきことし
秋萩も色付ぬれハ
萩の色付比夜も
くて孤（ヒトリヌ）ちきる
に蛬の悲むるハ我

是貞のみこの家の哥合乃うた
としゆき乃朝臣

秋乃夜の明るも知らす鳴虫は
わかこと物や悲しかるらん

題しらす　読人不知

秋萩もいろつきぬれはきり〱す
わかねぬことやよるはかなしき

ねぬなくよる虫つき
こやどかり
秋乃夜に露こそ
寒乃推量ふ秋の夜
寒さふ佗ゝし草村
ことに虫の鳴わぶる志
乃哉（テニ）いとさ（ハ）ふ字文ニ
露結為霜（ト）とも是
きみ忍ぶ草ふやつるゝ
君を忍ぶ草の心なく

秋乃夜ハ露こそことに寒からし
草むらごとに虫乃わぶれバ
君しのぶ草にやつるゝふるさとハ
まつむし乃ねぞかなしかりける
秋乃野に道もまどひぬ松虫乃
こゑするかたにやどやからまし

おもひゝなり古ハ松虫の今くね虫きこやつるゝハ弊の
宮古りやつるゝとよむ之口訣
秋乃くさむらいね ふ鳴す秋乃野に乃をまかひぬ
是ハ松虫乃こゑするかたへゆきて宿やかるべきと也
其乃声をたづぬるなり口訣

秋乃野にひとまつ虫
秋の野に人待ごふ
虫乃声するハ誰と
きゝいざゆかん我
とひてぞ詠（ト）ん之
もみぢ葉ちりて
紅葉の散積り居
も（ソカ）らね宿に誰を
まつ虫こゝら鳴らん
と云巨（コ）ト等（ラ）を出
おゝかたく
ひくらし乃なきつる
日晩（ヒクラシ）乃鳴つる折ふ

秋乃野にひとまつ虫の声すなり
われかとゆきていざとぶらはん
もみぢ葉のちりてつもれる我宿に
たれをまつむしこゝらなくらん
ひぐらし乃なきつるなへに日ハ暮ぬ
とおもふハやまのかげにぞありける
日ぐらしのなく山里乃ゆふぐれハ
風よりほかにとふ人もなし

秋乃日かたく暮ぬと思へハ山の陰にてありけると也 是ハ切
まとひ乃日くらしハちゝきせし定家卿云西山乃陰夕陽

乃絶ゆる事有りける故家乃本にはとせへは
山のかけ出侍る（そよと常勤）源氏にもせうとのきこえのことをとかるは日晩之
日くらしは夕暮にてなけれは今乃ゆふへ山に深くきこゆるを心
すむ人をよめり
日くらし乃なく山里は秋の夕は殊にも物悲しきひ
きあり日くらし鳴くを風よりほかにとふ人もなしと也

はつかりをよめる

在原元方

まつ人にあらぬものから
待人にあらねとも
初雁のねのめつらしきと
也

まつ人にあらぬものから初雁の
けさなくこゑのめつらしきかな

秋風に初雁かね
初雁は文をかくる
と誰か玉章の玉

是貞のみこの家の歌合の歌

とものり

玉つさをかけてきつらん
ことは雁かねの玉章と云
は蘇武か胡国よりて八
きし時雁の足に文を
結ひつけてはなちたる（蒙求書）事乃侍るし伊勢か秋風にと雁か
音こそといふは秋風にいやくなる此雁のなれたる文賢愚経に善友太子
の文を雁乃足に付けるにて波斯國よりも太子より付てと
けく帰りし事侍るし又雁書といふは雁の飛つらなる文字に似
たれは文字をいへり詩に多く雁字雁渡時といふ

秋風にはつかりかねそきこゆなる
たか玉つさをかけてきつらん

題しらす　よみ人しらす

わかゝとにいなおほせ
稲負鳥古今三鳥の一
也伝授なれは難知
いとはやもなきぬる
最（イト）はやくも鳴る雁
は露の色とる木

わかゝとにいなおほせ鳥のなくなへに
けさふく風にかりはきにけり
いとはやもなきぬる雁か白露の

本もとに紫ふせねすと
也（万）けさの朝（アシタ）雁金聞
つ春日山もみちにけ
らし我心いたし　万葉
又心乃哥契　秋霞
春かすみかすみて
春霞の立別ていぬ
名おもへつる雁金を
今ぞ秋霧の上になき
わするゝ之眼おの辞へと
よめり霞の字いつ迄て

いろどる木ゝももみちあへなくに

春かすみかすみていにしかりかねは
今ぞなくなる秋霧乃うへに

夜をさむみ衣かりかねなくなへに
萩乃したはもうつろひにけり

このうたハある人のいはく柿
乃もとの人丸かなりと

澄（スミ）てよめるとぞ古哥ハかりかねにてよむかすみといふを澄てよめれと
といふ説あり古き物語に延喜の時新羅の子の小童をめす時ハ八月なり
渤海より来て竹臺の下にたゝすみ雁の聲のみ勅して
哥よませとありしに春霞とよめる人の嘲哢の心ありといへると

ゆへにこの感嘆（カンタン）をとなり又新羅を霞といひ出るといはく佳
境に入るといへり佳境に到るとしてるハおもしろし之喜撰式に
和哥に八乃病を立らるゝ一にいはく縁物（ヨセモノ）着先始不表名色毀對
春山先可表冬山といへりとの哥乃躰なり
夜をさむみ衣かりかね　夜寒をわひし衣かりかね啼くるに萩の
下葉も色付てるとなりハかりのなくと云る頌によるなるへし

秋風にこゑをほに
上句を下句にてかくこ
と作る哥にこゑを
ほ（帆に）にあけてくハ声を
ほにしかくるを
いふ帆の形するを
おふとハ哥乃ふし

寛平御時きさいの宮の哥合乃
うた
藤原菅根朝臣（左京良尚子息也公）

秋風にこゑをほにあけてくる舟は
あまのとわたるかりにそありける

ハおもてハ帆也声をおもしろくうたふを聞ていふ古今集に秋
の田のほにこそ人を恋さらめといふハ穂にてよせてかく万葉に尺和延ハ

あしのうちにうつる心乃なりゆくさま姉妹に添へしもはやいはぬ也

か里乃なきけるをきゝてよめる

みつね

うき事をおもひつらねかりかねの
なきこそわたれ秋乃よな〱

うき事をおもひつらね
秋乃よな〱うき
事をおもひつらねて
鳴わたるを雁によ
そへたり

是貞乃みこの家乃歌合のうた

たゞみね

山さとハ秋こそことに侘しけれ
志かのなくねにめをさましつゝ

山さとハ秋こそことに
山里ハいつハあれと秋
ハ殊に侘しく鹿乃
鳴音に目を覚しておと
ろかるゝと

読人不知

おく山に紅葉ふみわけなく志かの
こゑきくときぞ秋ハかなしき

題志らず

秋はぎにうらびれをれバあしびきの
山したとよみ志かのなくらん

おく山に紅葉ふみ
秋ふかく成て深山の
紅葉ふみ分てなきくる
をかなしく鹿の声
聴てハ此乃秋ハ悲して
悲しきぞ秋ハ悲し
きハ鹿乃こゑきく
時ハ乃類之猿丸大夫
の歌也 秋ふかく成て端山まてハ何ハある比みやまに紅葉を散らて
鹿ハおく山にすむされハおく山にとよめる也 吳
秋はぎにうらびれ 秋萩の枝もひうれへされハ鹿乃山下とよみ鳴 既臣
こゑしうかへしひきり（錦案） 物かなしうれへされハと云声も
きぬ萩をしをりねとさそう乃鳴るをもうしみれるかな
みたるゝ心そのつまとまりやこよみハひゝくといふ事也とよみ奇
合りわくつまそく

秋萩を志からみふせて萩を打ふせて鹿乃鳴の目にハみえすして音のさやかに鳴ゆるを鹿乃志からみ萩乃中に有るをいふむすひ縺一つなるといふ柵字也鹿乃萩を打ふせさるを似せて柵（シカラミ）といふさやけさハ月乃あかきさまにも万葉に清（サヤカ）と云きこゆるにもよむ字也鹿乃声乃さやけさハ声乃すみきこゆる也古語拾遺にあなさやけおけとハ竹葉の聲也といへりされハことなりともかよハすや（形治）あきはき乃花さきにけり萩乃花さけハ尾上の鹿ハ今やなくらんと之詩にも暁露鹿鳴花始開とあり萩を鹿鳴草とも云て鹿鳴て花咲といへハかくよめるなり高砂の尾上とハ山乃尾乃うへといへハ嶺を云

秋萩を志からみふせてなく鹿乃
めにハみえすて音のさやけさ（きイ）

是貞乃みこの家乃哥合によめる

あきはき乃花さきにけり高砂の
おのへ乃志かハいまやなくらん

高砂の事序に譲ス秋萩のふるえに咲る萩乃古枝に咲花の本の字を忘れねことく首和る人にとありかゝるとよミ字ハ（形注）萩の中に古枝より春葉出めくミ萌く秋花咲るを見て木榛（コハキ）ニハ木乃部に入けり万葉乃志野乃たまりこよめるを榛原とかける流ね乃萩ハ草之古枝に乃くハ木榛とて本はき也されハ乃木榛もこれをよめり秋はきの志からみふ萩乃下葉のもみつ時に獨寝すれハいねかてにする人乃目を合せね

むかしあひしりて侍りける人乃秋の
野にあひてものかたりしけるつ
いてによめる　みつね

秋萩乃ふる枝にさける花みれハ
もとの心ハわすれさりけり

題志らす　よみ人志らす

秋はき乃志たはいろつくいまよりや
ひとりある人乃いねかてにする

こまかにいふてハ離寝也ひとりねる人とハやもめすと乃月を合せぬ心
也されハ鰥（クハン）字魚乃目をあハせぬ事よりなりたる字也

なきわたる雁のなみだや
物思ふ宿の萩の上乃露
に鳴わたる雁の涙や
おちてなきつらんと云哥
雁の鳴てわたるより萩の
露を見て云る也合せて
より古今秀哥十首
撰くまゐらせよと後
鳥羽院より定家ニ仰
出されし時此哥其一也
萩乃露玉にぬかんと
萩乃露の玉に似さ

なきわたる雁乃なみだやおちつらん
物おもふやどのはぎのうへのつゆ

萩乃露玉にぬかんとゝれハけぬ
よし見ん人ハ枝なから見よ

ある人乃いはく此哥ハならのみ
かとの御哥なりと

おりて見ハおちそしぬへき秋萩の
枝もたは（こそイ）ゝにをける白露

それをつらぬかんとすれハきえぬるゆへ見よと人ありけりとそ

おりて見ハおちぬへし　萩乃露なりとてもをまゝく枝たをらすいろいろなんを
おりて見んハおちる事をしれ是をおそれてやすらかなる事なり　詩ニ百般艶折
一時情と萩をいふなりその枝もたわゝを云二乃説をつけ
いつれにても露おもく重く枝乃さかりなるをいふ也
宗祇萬葉より十尾（トヲ）と出り撰ニ秋萩乃枝もとをゝに風ゆくを
白露おきそれにけらかり

萩か花ちるらんを乃
小野乃萩か花のちる
らんすれハ露霜より
ぬれてゆかんさ夜ハ

萩か花ちるらんをのゝ露霜に
ぬれてをゆかんさよハふくとも

ふけるとも夜をおもハすとそ　ぬれてゆくそれ乃とハ斗すけ字也
定家ニ云他門よりハ露霜をつく霜とよめり露とハよみ庭
訓ハ露霜とよむ経をいはふけれともあけすをよねれとん
露也むろくハ霜とよる名別れ萬葉十一ゆけとく何ハね嬉ゆ人々
既乃何は露霜よりぬれてもゆかむ（定家勘）又秋乃露霜れと續

露霜乃さきくめ乃秋風にとよめり露霜乃けやすき命と詠
するも当物を付けて花六帖哥り乏しき小秋乃露霜たるをうを
妹か袖をかつぬけれは秋乃霜を露霜とはよむとうりと
霜と当種と知へし
文屋朝康　康秀子延
喜三年任大舎人允大
膳少進従うつれ
秋のゝにおく白露
秋野の露は玉なる
を蜘の糸筋にてつ
ぬきかけたると云
名にめておれる斗
女と云名にめてゝる
よりおかる斗り
秋落すると云へり

是貞乃みこの家の哥合によめる
文屋あさやす

秋のゝにおく白露は玉なれや
つらぬきかくるくもの糸すち

題しらす　僧正遍昭

名にめてゝおれるはかりそをみなへし
我おちにきと人にかたるな

僧正遍昭かもとにならへまかりける

語るくてより出家
落随去するはよらる
ぬまりそれはさそれ
てうり房は須去を
をみなへしうと
男山に女郎花のさきたるを
よみねりと見て
うるはしと云う女郎花
とみけは女のよふてよ
めり
秋乃野にやとりはすへし
女と云名のむつましき
名れは旅ならねとも秋
の野に宿るへきとの
をみなへしおほかる

時にをとこ山にてをみなへしを見て
よめる
ふる乃いまみち（布留今道従五位下造酒正）

をみなへしうしと見つゝそゆきすくる
おとこやまにしたてりとおもへは

是貞乃みこの家の哥合乃うた
としゆきの朝臣

秋乃野にやとりはすへし女郎花
名をむつましみたひならなくに

題しらす
をのよしき（小野美材参議篁孫大内記 式部少丞後生子）

をみなへしおほかるのへにやとりせは

女の名ある草のおほき
のにねてはかならず
あだの名をや立なんと
をみなへし秋の風
秋の野風に女郎花も
のこらずなびきたるを
誰によすらんと
秋ならてあふ事かたき
天の河原に女郎花も
生ぬ物ゆへ〈織女のこと
とく秋ならてあふ
こそあはれなれば
あまりとく
たか秋にあらぬ物故
人の秋なるでもなく

あやなくあだの名をや立なん　美材

（寛平法皇亭子院と号す）
朱雀院乃女郎花合によみて
奉りける
左乃おほいまうちぎみ（本院時平公昭宣公子）
をみなへし秋乃野風にうちなびき
心ひとつを誰によすらん

藤原定方朝臣（勧修寺高藤子号三条右大臣）
秋ならてあふ事かたきをみなへし
あまのかはらにおひぬものゆへ

つらゆき
たか秋にあらぬ物ゆへをみなへし

我秋ならぬに
女郎花の色に
に出てまだきうつろ
ふぞとなり秋を飽に
よせてなりゆき
いふなし遠字也
誰秋とは誰が秋ぞ
るゝもあらぬとなり
妻こふる鹿ぞ鳴
をのかすむ野より
女郎花のことゝ志らずして妻こふる鹿の鳴と云ふ源氏にも
さをしかの流にすめる萩乃露をもふみされど女郎
花をばなんなりよせよめり
女郎花吹過てくる　女郎花の風には見えねど吹る
風の香はしるくると云り　秘口訣

なぞ色に出てまだきうつろふ

みつね
つまこふる鹿ぞなくなる女郎花
おのかすむ野乃花としらずや

女郎花吹すぎてくる秋風は
めにはみえねど香こそしるけれ

人乃見る事やくるし女郎花の人の見るをいやくるしさらん秋霧にのみかくるゝかと也（口訣）

ひとりのみながむる独行する詠るよりハ宿にうへて女郎花を見るべきをとぞ（口訣）

をみなへしうしろめたさあれたる宿に女郎花の独たてれバ心もとなくみゆるとよみける也

たゞみね

人乃見る事やくるしき女郎花
秋霧にのみ立かくるらん

ひとりのみながむるよりハ女郎花
わがすむやどにうゑて見ましを

物へまかりける（イまかりけるに可用）人乃家にをみ
なへしうゑたりけるを見てよ
める

兼覧王（かねみの王　惟喬親王子　宮内卿　神祇伯）

をみなへしうしろめたくも見ゆるかな
あれたるやどにひとりたてれバ

是ハ心もとなきと也（口訣）

花にあかでハ帰る花にあかで何きやって帰らん女郎花乃多かる野に寝ぬべきものをと云旅をも知るべし也

何人か来てぬぎいかなる人か来てぬぎかけし藤袴にておるゝ秋ごとに野べを匂はすと也（口訣）

寛平御時蔵人所乃をのこども嵯峨
野に花見んとてまかりたりけ
る時帰るとてみな歌よみける
ついでによめる　平さだふん（貞文　号平中　右馬権佐好風男）

花にあかで何かへるらん女郎花
おほかる野べにねなましものを

是貞乃みこの家の哥合の哥
としゆきの朝臣

何人か来てぬぎかけし藤袴
くる秋ごとに野べをにほはす

藤はかまをよみて人につかはしける

貫之

やとりせし人のかたみを
ふちはかまの忘れかたき
く香にはやまかせし
人のうつりかとする也
私口訣

やとりせし人のかたみかふちはかま
わすられかたき香にゝほひつゝ

ふちはかまをよめる

そせい

ぬしゝらぬかこそにほへれ
主ハ誰ともしらて
秋の野に香ハ誰
ぬきかけし藤はかま
そとぬしの名を
たつねたりし也
今よりはうへてたに
秋の哀（秋風）ハいつもなれ
花すゝきの穂に出て

ぬしゝらぬかこそにほへれ秋の野に
たかぬきかけしふちはかまそも

たいしらす

平貞文

今よりはうへてたに見し花すゝき

まねく比は侘しき猶
と今よりはうへてみし
すきとよめり穂に出る秋ハとハ侘しさの寂寞しける也（[illegible]）
出て見へぬ也万葉に人ハみな萩を秋といふ我ハ尾花
か末を秋とはいはんとよめる哥も侍り吹風を咲くなる
みよ露ハ秋やいなかりけるなよふれたる三れ草ハ名をもゆるし
けりとも折ある故にゆまてといひて[illegible]
見すとよまれしなるの名し是と顕昭云但此哥尤よろしく口訣

ほに出る秋はわひしかりけり

寛平御時きさいの宮の歌合の
うた

ありはらのむねやな

秋の野乃草のたもとか
秋乃野の草の袂
まねくあるかの穂の
花すゝきハまねく
袖と見ゆる哉也
比喩を尾花にといふ 六

秋の野乃草のたもとか花すゝき
ほにいてゝまねく袖と見ゆらん

白馬乃尾に似たる故也源氏にも花の色〱にてさかりなるをさし
とこなつにかへりて折かへりハすぐれたる也後鳥羽院定家卿より哥
一首ありける袖とよりとハよむやうきたるの心勅問ありしに此哥を引出
てそうしけるとやされたるとのや新勅撰に雖經哥ハ花すゝき
草乃袂を切りあへて草乃露やとよきところあさき此哥をとられけり
われのみやあはれと
思のときと平り也
さまよひすけとき
あく〱すのなく夕影（カゲ）
乃大和撫子ハおそ
やりけるへきこと
（及び）家經朝臣和歌
序ニ鍾愛抽衆草ニ
故ニ曰撫子ト艶色無隣ニ
千年故曰常夏と

素性法師

われのみやあはれとおもはんきり〱す
なくゆふかけ乃やまとなてしこ

題しらず　よみ人しらず

みとりなるひとつ草とぞ春ハみし
秋ハいろ〱乃花にそありける

かへり花の落ちてさやうにうつろへハなをさきさかさく〱
撫子とよみさりたれハ常夏といへり切る撫子ハなでしこ也
ことなるハ皆ゑ撫子ゆゑなく花のとゆうハおよそかはらなでしこ秋の
野なり一とふちくわう咲ける（先生顔原異）家と思ひんハ非義惜也白き
千なるひとつ草春ハ緑（ミドリ）なる一つ草としてつるか秋ハいろ〱の
花咲けれハくの名をありけると六百番歌合に定家卿のひとくと
そのさるく咲ひのひとつ草のまもの草題若草と此本哥とれく
る由俊成卿の判に云り
もゝ草の花のひも
色〱の花のひもとく
秋のゝにひらけれ
むすひ人あるなると
いさ花の紐とくと
いはれたく戯んと
いふ花の開くるを紐

もゝ草乃花のひもとく秋のゝに
おもひたはれん人なとかめそ

月草にころもハすらん朝露に
ぬれてのちハうつろひぬとも

仁和乃帝みこにおはしましける

こゝと云基俊説ニ
へそのくらゐのつく
むとハや霧のした細
きくそくらん　百
草とハ数多の草を云也
月草ハ衣にすらん
古今又るよのうく
しくれハ露にぬれき
てのちハやゝうつ
ろひぬるも月草の
衣をすりてはする（草と云）月草ハ露草也鴨頭草鶏冠草とも云

仁和の帝みこにおはしましける時ふるの滝御らんせんとておはし
ましける道に遍昭か母の家にやと
りたまへりける時に庭を秋のゝにつく
りておほむ物語乃ついてによ
みてまつる　僧正遍昭
さとハ荒て人ハふりにし宿なれや
にはもまかきも秋のゝらなる

まことうつりやすき色深る花之うつろひやすきむし
さとハ荒てく人ハふり　里ハ荒果てく人ハ古ミくあれハ
庭もまかきも秋の野らとありしとてのらハ野也万葉に数くら
草とも云まかきとハ前栽也籬の字まかきともかきともよむ口決

ふくからの秋乃草木
吹からに秋の草木のしを
るれハむへ山風をあらし
といふらんと云ある故
をもこれより山風を
嵐とかきつゝ宗
ハあらす山風にあらき
物あれハ山風を嵐と書て（アラシ）
よみけむハ（字謎とも
云む）と云也此組て
此歌を九品乃下品に
入てわつかに一ふし
ある歌とそ

古今和歌集巻第五

秋歌下

是貞乃みこの家乃歌合乃うた

文屋やすひて

ふくからに秋乃草木のしをるれハ
むへ山かせをあらしといふらん
草も木もいろかハれともわたつ海の
波乃花にそ秋なかりける

草も木もいろかハれとも　与草木ハ色乃かハれとも海乃波の花にハ
川とかいのうく不変りてよく秋の事もわかるとかわらぬ

と四字ハなくともこれら千と云字ハよむとつ乃字にてよむ也
大陽（ヒノカミ）海若（ワタツミ）と云 ヨミクセ口決
もみぢせぬときはの山ハ
又紅葉せぬ常盤乃山これ
ハ吹風乃音ニ秋を聞ゝ
わたるらんと云り歟
常盤ときは乃山に侍展ハ
をとに聞へや秋を志る
らん同心也
霧たちてかりそなく
霧立雁鳴ハ朝原ハ名
所也けふりたつらんと云
かみなつき時雨もいまた
神無月の時雨も未
ふらねよ神南備の森

秋乃哥合志侍る時よめる
紀よしもち（淑望 中納言長谷雄男 大学頭）
もみぢせぬときはの山ハふく風の
をとにや秋をきゝわたるらん
題志らず　よみ人志らず
霧たちてかりぞなくなるかた岡の
阿さ乃はらハもみぢしぬらん
かみなつき志ぐれもいまたふらなくに
かねてうつろふかみなびのもり

ハまくらいろひとち
と云り神南備山ハ大
和ニ有かみなびの森ハ
山城山崎の南ニ有
ちはやふる神なひの
神南備山乃紅葉ニ
思ひ乃色をうつし
きそやうつろハん
するなと云口訣
おなしえをわきて
同し枝を分て木葉
乃うつろふハ西乃秋乃
方なれハと云り
ふハ紅葉する（ヒタリ）とハ
万葉ニ金風と云西風

ちはやふる神なひ山乃もみちはに
おもひはかけしうつろふものを
貞観（清和天皇）乃御時綾綺殿乃まへに梅の
木ありけり西乃かたにさせりける
枝乃もみちはじめたりけるをうへにさ
ぶらふをのこどものよみけるついでに
よめる
藤原かちをん（勝臣従五位下肥後守 任相模守 或藤生子作生子）
おなしえをわきてこのはのうつろふハ
にしこそ秋のはしめなりけれ
石山にまうでける時音羽山のもみぢ

風にも秋風をまちり
秋可世のふきにし日より
秋かぜハ色なき風肌
寒く吹し時より
音羽山の梢も色付き
るとぞ　久てれての円
原に音ね月にきくと云
こ秋風の吹にし此歌
時節ことに可分別矣
志ら露のいろハ一つを
いふて白露の秋葉
をちゞに染むらん哉
秋乃よの露をそ露と
秋の露をハ露と云
てあるに雁の鳴涙
ハ千洞そての心を染

見てよめる　貫之
秋可世乃ふきにし日よりをとハ山
みねのこすゑもいろつきにけり

是貞乃みこ乃家の哥合によめる
としゆきの朝臣
志ら露乃いろハひとつをいかにして
秋乃このはをちゞにそむらん

壬生忠岑
秋乃よの露をハつゆとをきなから
かりのなみたやのへをそむらん

らんとぞ露ハ夜志らく
そく袖ぬれたまり
あきの露いろ〳〵ことに
山乃木の葉の千くさに
うつろふるハ露の各
別なるぞとそ云なる
むべなり　口訣
志ら露も志ぐれもいたく
露も時雨もいたくもる
山ハ下葉も残さず色
付なると云　雨やさく
名残なる哥と定家
に秀哥千首見えし
雨ふれど露もらし
笠取乃山ハ雨も露

題志らず　よみ人志らず
あき乃露いろ〳〵ことにおけばこそ
山乃木の葉のちくさなるらめ

（近江）もる山乃ほとりにてよめる
つらゆき
志ら露も志くれもいたくもる山ハ
下葉のこらすいろつきにけり

秋乃哥とてよめる
阿りはら乃もとかた
雨ふれど露ももらしをかさとりの

をりしもといつてりね
あふるゝんとも見え
山ハ提醐のこと
ちはやふる神のいかき
神乃井垣にかゝる葛を
らハ常盤なるへきを
世間のと同しく秋なれ
こゝへともみちするを
也あへすとハ堪といふ
へとも定家卿哥さひ
神とも秋なれハ
さきの乃あたりの
小野乃御君とも云ひ
あへとハせひなくすの
（時雨ハさすかのつかも山のおくへすら本歌）

やまはいかてかもみちそめけん

神乃やしろのあたりをまかりける
時にいかきの内乃もみちを見て
よめる

貫之

ちはやふる神のいかきにはふくすも
秋にはあへすうつろひにけり

是貞乃みこの家の哥合によめる

たゝみね

雨ふれはかさとり山乃もみちはゝ
ゆきかふ人乃袖さへそてる

雨ふれはかさとり山の
かさす袖さへし
時雨ぬれハ紅葉より山
こといへるなり口訣
ちらねともかねてくう
紅葉ハいまハ限りの
色と見つれハちりぬ
ちるまてをしくおもふを
口訣あり
たか為の錦なれハ
誰か為の錦なるか
かくれハさほの山へを
秋霧のたちかくすらん
ことに錦とハ紅葉を
せてかくす袖なれハ

寛平御時きさいの宮の哥合のうた

よみ人しらす

ちらねともかねてそをしきもみちはゝ
いまはかきりの色と見つれは

やまとの国にまかりける時さほ山に
きりのたてりけるを見てよめる

紀とものり

たかための錦なれはか秋きりの
佐保乃やまへをたちかくすらん

是貞乃みこの家の哥合のうた

よせて云ふ口訣
秋ぎりハけさハ
佐保山乃柞（ハヽソ）の紅葉
よそながらも見るべけ
れハ今朝立ること
柞落ちやすくて為
白き物されど
さほ山乃はゝそ此
柞乃色ハ薄くと見
ゆるに秋ハ深くふ
くなるよし時節
のうつりを知る
ことし
うへしうへハ秋なき
うへし植ゑハ秋

よみ人志らず

秋ぎりハけさハなたちそ佐保山乃
はゝそのもみぢよそにてもみん

秋乃うたとてよめる
坂上是則（好蔭か息叙 大和守田村丸裔）
さほ山乃はゝそ乃色ハうすけれと
秋ハふかくもなりにけるかな

人乃せんさいに菊にむすびつけ
てうへける哥　在原業平朝臣
うへしうへハ秋なき時や咲ざらん

なき時や咲ざらん
花こそちるとも根ハ
かれまじきと云り秋
の何ん年よりハ咲べしと云んより秋乃なき時ハ咲まじきと云ハ
為白きさし菊をちらしね植れど此哥にちるとよめれハよむべきふこう
一説御読うふうゝめるなるハ秋なき年乃うちハ志てと根ふかれ
まじけれハ秋必さくべきとよめり
久かた乃雲のうへにそ
雲の上にてみる菊
そ天津星としあや
れけると云久方の雲
乃上ハ殿上を云菊
ハ星なり似たり久
方ハ雲の上といはん
ことし

花こそちらめねさへかれめや

寛平御時菊乃花をよませ玉ふ
ける
としゆきの朝臣
久かた乃雲のうへにてみる菊ハ
あまつほしとぞあやまたれける
此哥ハまだ殿上ゆるされざりける時
にめしあげられてつかうまつ（れイ）るとなん

露なからをりてかさゝん
菊ハ仙家乃花なれ
是ハ露なからをりて
かさゝし老せぬ秋
乃行末久しかるへく
さし露乃また千年
をへぬるといふ露
なりしと
うへし時花まちとをに
花さかんとまちしに
けふハうつろふと
むすひつるにしかもうら
つろふ秋ノ行にあ
こハ思はさりしと

まん

是貞乃みこの家の哥合のうた
きのとものり

露なからをりてかさゝん菊乃花
おいせぬ秋乃ひさしかるへく

寛平御時きさいの宮の哥合の哥
大江千里

うへし時花まちとをにありし菊
うつろふ秋にあはんとや見し

おなし御時せられける菊合にす

秋風のふきあけり
秋かせの吹上の白菊
ハ花かあらぬか又
ハ浪のよするを
うたかひ見るハ今も
と見るめの[illegible]
るゝをかめんとし
秋風ハ吹上といふ
めい風とあへらひ
（紀州）浪のよするかと
吹上浜にて吹
浜の名所を吹上なり
白菊と云字露
古今十首の一也
ぬれてほす山路の

すはまをつくりて菊乃花うへたり
けるにくはへたりける哥　吹上乃（紀伊国）
浜のかたに菊うへたりけるをよめる

菅原朝臣（延喜元年[illegible]）（小野の[illegible]）

秋風乃ふきあけにたてるしら菊ハ
花かあらぬか浪のよするか

仙宮に菊をわけて人のいたれ
るかたを読る　素性法師

ぬれてほす山路乃菊の露のまに
いつかちとせを我ハへにけん

仙家（センカ）乃菊をおる人乃露に衣乃ぬれてほすまもなく
千年をへる事乃あるまじきにいつか千年を我ハへにけると
経りかける事乃人あるべくいふ也又晋王質かきこり
にゆきて仙人乃碁をうつを見てしはしの間に旧里に帰れハ七世の孫
なり何ひさしき之斧乃柄くさる事もありそのうち
こゝろをも仙家のことをよめり

花見侍る人まつ時ハ
菊の花もしろく人も
時にしろく人の白妙乃
袖かと菊のあやま
たるとそいへる
人まつほとよめる也
白妙の袖ハ白き衣
袖也　淵明ハ陶潜といひし
人九月九日より

菊乃花のもとにて人乃ひと待る
かたをよめる　とものり

花見つゝ人まつ時ハしろたへ乃
袖かとのみそあやまたれける

おほさハ（大沢　嵯峨にあり）乃池のかたに菊うへたる
をよめる

酒なくて籬下より
菊をとりてあそひて
吟じゐたる
に王弘（コウ）といふ人乃使
白き衣着たる者酒をいれてもちきたりし事をおもひよせ（蒙求ニアリ）
てよめり朗詠に王弘使立晩花前（王弘カ使ハ晩花ノ前ニ立ツ）　伊勢かたりに白き衣乃人の
さまを菊ハおもふ人乃袖かともみゆといふ事も白衣乃容を
おもへるとそゆ（伊勢物語ニ業平詠の哥あり）
ひともとゝおもひし花一もとおもひしを池乃底にもみゆれハ
興しくよみてなるとおもひも哥に菊とかへす

ひともとゝおもひし花をおほ沢乃
いけのそこにもたれかうへけん

世乃中のはかなき事をおもひける
おりに菊の花をみてよめる
つらゆき

秋のきく匂ふかきりハ世ハはかなきさためなるまつ菊乃匂ふ花をかさして楽をつくさめんとなり

心あてにをらハや菊乃咲たるに初霜乃白く置わたりてさらにそれとも見わかねハ推量してをらん折つまさし折らハや折らんハ思ひわつらひたる心おきまとハせるハ置まよへるをいふなりとまかひて同し菊ハ霜にうつろへるをといひて言事ある此志らさうりを尽する花也朗詠に蘭蕙苑（ランケイヱン）嵐摧（クダイテ）紫ヲ後蓬莱洞（ライトウ）月照（テラス）霜ヲ中といへり訣

秋乃きくにほふかきりハかさしてん
花よりさきと志らぬわか身を

志らきく乃花をよめる　凡河内躬恒

心あてに折らハや折らん初霜乃
をきまとハせる志らきくの花

いろかはる秋のきくをハ菊ハうつろひて紫になりかはりたれハひととせにふたゝひ匂ふさかりをみる事也色かはくれハうつろふをも伊勢物語に神無月院にてり折菊の花うつろひさかりなるを色ハうつろひて二度盛なるにハあらすさかゝ又縁なるを秋をおきて時こそあり菊のうつろふからに色のまさりてみゆ

是貞乃ミこ乃家の哥合乃うた
よミ人志らす

いろかはる秋乃菊をハひとゝせに
ふたゝひにほふ花とこそ見れ

仁和寺に菊の花めしける時に
哥そへて奉れと仰られけれハ
よミて奉りける　平貞文

秋をおきて時こそありけれ菊の花
うつろふからに色のまされハ

人乃家なりける菊の花をうつ

るハ秋より冬にいたるを
の盛の時すくる也
是ハ移菊ときこゆ
秋部に入ることハ
人の家よりかへてかくは
詠すへし口决
さきそめし宿し
菊の咲そめし宿の
かはりぬれは色さへ
うつろひけるとそ
つらゆきハ家のかはるに
よそへて（落葉）後撰の心
佐保山のはゝその
紅葉のちるをも夜
さへ見よとて月の

つしうゑたりけるをよめる
つらゆき
さきそめし宿しかはれは菊の花
いろさへにこそうつろひにけれ
題しらす　よみ人しらす
さほやまのはゝその紅葉ちりぬへみ
よるさへ見よとてらす月かけ
宮つかへ久しうつかうまつらて
山里にこもり侍りけるによめる
藤原関雄（真夏子叙従五下号東山進士　禅林寺彼旧宅）
おくやまのいはかき紅葉ちりぬへし
てる日のひかりみるときなくて

照すとこゝろへへしと
いふことハ詠すへからす
おくやまハえしらし
てる日乃光見えな
らく奥山に籠りてぬるく岩垣紅葉乃ちるやうに我身を（中將）
へるより岩垣（離れし我）紅葉のちりぬへし山家にこもる身をつかへ
たてまつる紅葉也岩垣沼（又）岩垣清水同し天子を見まゐらせぬを照
日乃光見る時なくてといへり
龍田川紅葉
立田川に紅葉のこ
[illegible]す
[illegible]て
ハ錦をたちけることゝ
くゆるかと御[illegible]
中絶なんとそ歎
題しらす　よみ人しらす
たつた川紅葉みたれてなかるめり
わたらハにしき中やたえなん
此うたハある人ならのみかと（文武天皇）の
御哥なりとなん申す

たつた川にちりてなかる家
立田川に紅葉のなか
るゝを見て上の
三室山に時雨ふるらし
と云家隆ハ三室の山に
嵐ふくらしとよまれん
とつゞるを定家ハ嵐ハ
心なき也時雨ハ
心ある也と云口訣
こひしくハ見ても恋しくハ見てもはゞ無きまへる
く山下風乃かせなきまよはしく花口訣
秋風にあへとちる
秋風にあへずちる
紅葉のゆくへさだめぬ
こゝろ我身に似たる
身の悲（カナシ）さよと云也

たつた川にちりてながるゝ神なびの
みむろの山にしぐれふるらし

又ハあすか川もみぢばながる　此哥不審（人丸哥他本又同）

こひしくハ見てもしのばむもみぢばを
ふきなちらしそ山おろしのかぜ

秋風にあへずちりぬるもみぢばの
ゆくへさだめぬわれぞかなしき

秋ハきぬ紅葉ハやどにふりしきぬ

すハ不審なり
秋ハ来ねとよむハ東
紅葉ハ宿にふりしき
ぬるみちふみてとふ人
ハなきと秋をきね
と云同人の哥にも宗
對て秋ハ来ねと云
よや　此哥口訣
ふみわけてさらにや
紅葉乃降くし
さるを見ながら三
かくれハふみていまハ行くまじきと
秋乃月山へさやかに
山へてらすらんと
ふく風乃いろのちくさ

みちふみわけてとふ人ハなし

ふみわけてさらにやとはん紅葉の
降くしてしみちと見ながら

秋乃月山へさやかにてらせるハ
おつるもみちのかすを見よとか

おつる紅葉乃数を見よとて也月乃

ふく風乃いろのちくさに見えつるハ
秋乃木のはのちれバなりけり

吹風の色ちかく見えつるハ秋の木

あきれちりまがふはそらに風は見えねど散るとも散れれと
いろあるし

霜乃たて露乃ぬき
霜乃たて霧のぬきにて山の錦を織れ
るがよわければや破れ
やすきさといへり世の中
多かる[illegible]そて此
錦[illegible]しいふ[illegible]をき
そり紅葉[illegible]ぬ
さハ紅葉を錦と
いふなりそし　識霜（リニ）
識霜に三稜錦とも

せきを

霜乃たて露乃ぬきこそよわからし
山のにしきのおれはかつちる

うりんゐん乃木のかげにたゝずみ
てよみける
僧正遍昭

わび人乃わきて立よるこのもとは
たのむかげなくもみぢちりけり

雲林院ハ淳和天皇乃離宮（リキウ）也仁明天皇の御子淳和（ジユンナ）〔？〕常康（ツネヤス）親王のすみ給ひし所也親王出家ありて堂（ダウ）となし遍昭
元慶寺となりたり天暦乃頃時賢性僧都別当たりしに此寺にて
塔をたてまつりて勅（チヨク）に呉竹を植又霊験（レイゲン）ある観音像ありて東
西七十三丈南北七十三丈也雲林院ハ紫野にありて世尊寺の東にすきたら
えうれ近衛のうらといふ所也

わび人乃わきて立よる　世を侘たる者の立よる木の下ハ頼む陰なるを
此木のもとハ木の葉もおちつくして世をしのぶ人のよめる也詠歎（タンサイ）あるさまといふなり
わび人ハ世を侘たる人也たのむかげハよりたのむ（ヨリタノム）ところにて木陰より
立よる陰をたのむ陰とよめり侘人のたのむべきかげもなくもみぢの散りしを
にたとへておもひを述
みせまつれる也

もみぢばのながれて
湊には色も紅ふかき
波は白き物なれど
紅葉の流れ来たる
るみなとは紅に
ち波乃立らん也

二条后乃東宮乃御息所と申しける
時御屏風に龍田川に紅葉流
れたるかたをかけりけるを題にて
よめる
そせい

もみぢばのながれてとまる湊（ミナト）には

くれなゐふかきなみやたつらん

業平朝臣

ちはやふる神代もきかす竜田河
からくれなゐに水くゝるとは

竜田川ハ湖によせ
まて意ありて又紅
ちはやふる神代ゆす
川に紅葉ちりてある紅葉
乃下をくれなゐにそ
おもしろきをなゐ
りてくゝると云紅葉
とハ何のゆゑさもすして紅葉乃ちるを神代もきかすといへり芦鴨
まその面を物くゝるといふ潜（クヽル）字也此哥伊勢物語ニハ御子かへせうゑり
き水の面にまくると云ハ河乃水のおもくよふゆらんての此集のこゝ
出すハ二条の后乃御屏風ニ竜田川ニ紅葉ちりたるかたを絵
てとありハ[illegible]あけん不審　口訣　業平ハ后ハ心頭みけする所
あまた哥也又寛平宮滝乃御幸より在原友于哥に時雨ニハ竜田の川
もみちかりそれるめりに木なしことくて此哥ハ時雨ニ竜田川の中際
させ紅葉をまてとよめり只同事也友于ハ行平の息也男ハ哥を襟拵（カスメヨス）

是貞のみこの家の哥合のうた

としゆきの朝臣

我きつるかたもしられすくらふ山
木々の木の葉のちるとまかふに

たゝみね

かみなひのみむろの山を秋ゆけは
にしきたちきる心ちこそすれ

北山に紅葉おらんとてまかれりける
時によめる　　貫之

見る人もなくてちりぬるおく山の
紅葉はよるのにしきなりけり

我きつるかたも志ら
晴部山乃木々の葉
葉のちるにまかひより
わからぬよりも志
られぬとなり　口訣
かみなひのみむろの山
三室乃山を秋ゆけ
ハ紅葉乃くれなゐ
り見ゆれハ錦を
たちきる心ちのすると
なり錦蘭備ニ云二の
名ハ大和
見る人もなくて散の
錦ハ夜のめてなき
物なれとよるやさよ

着るハ出世をすることなれハ着る錦ハ出世をいふなり（蒙求本説）
朱買臣（シユバイシン）ハ身貧（ヒン）なり志く薪をうりなから文を腋にはさミてよく
学問せしゆへ帝よりめして会稽山乃太守となして故郷に
帰らしむ 史記ニ云 富貴不レ帰ニ故郷一（フウキニシテコキヤウニカヘラサルハ）着ニ錦ヲ如ニ夜行ルカ一 といへる事なり（安勤学）

たつたひめ手向る
立田姫乃手向する
神乃あれハこそ紅
葉をぬさと寄せる
と云 ぬさとハ旅行
乃時道乃神乃
神に手向る物也
乃幣る紙を切て
ちらす又金銀朱浅
あてもちらすなり
立田姫ハ秋をつかさ

秋乃うた　かねミの王

たつたひめたむくる神乃あれハこそ
秋乃このはのぬさとちるらめ

をのといふ所にすミ侍りける時紅葉
を見てよめる　つらゆき

秋乃山紅葉をぬさとたむくれハ
すむ我さへそ旅こゝちする

とる神也 旅乃行かひの神ハ道祖神なりさへ乃神とも手向の神ともいふ
いへり和名ニ御（ミヌサ）幣とも云この幣をみて行とも出るとも
秋乃山乃紅葉をぬさ 歌乃秋乃山乃紅葉をぬさと手向るを
くらへて見ゆれハ此山にすむ我さへ旅の心ちすると也

神なひ乃山をすきゆく
竜田川に紅葉乃
なかるゝハ神なひ山
をすきゆく秋の手向
るぬさとて流るゝを
こちらもいさく
秋のたむくるぬさと
いへり例乃哥
書にゆつるそ

神なひ山をすきて立田河をわた
りける時に紅葉のなかれけるを
よめる　きよはらのふかやぶ

神なひの山をすきゆく秋なれハ
たつた川にそぬさハたむくる

寛平御時きさいの宮乃歌合
乃うた　藤原のおきかせ

志ら浪（ナミ）に秋の木の葉ハ
舟ハ木の葉の名あり
流るゝをみんとくつれ
おもひされハ木の
葉のうけるを舟と
見るとなり（千載和歌）万葉集に
り七条后にてそれを
る経寄にハせのみ[illegible]
舟あまりる[illegible]に
この[illegible]禁（きキ）[illegible]
きこゆり春まくて子す舟生乃川風に秋来て一葉の舟の[illegible]
紅葉ゝ乃なかれさりせハ竜田川より紅葉乃なかるゝすハ水の秋を
知人何ゆへ（独吟）とし
志賀山越（雅）北白河乃
流乃僧より乃な

志ら浪に秋の木の葉のうかべるを
阿まのなかせる舟かとそ見る

多つ多川乃ほとりにてよめる

坂上是則

紅葉ゝ乃なかれさりせハ多つた川
水乃秋をハ多れか志らまし

志賀乃山こしにてよめる

春道列樹（ツラキ）（[illegible]）

てやまとの嶽越に志賀へ
出る路也志賀山越ハ
春ふかく参ることす
るゆゑ細川院次第
百首よりハ春詠より出す古例ゆへ六百番歌合に出せり
山川に風のかけたる 山川にあれハやしね紅葉ハ風のかけたる
志からみ中へ何るとて風のかけてとまりくよみ出せるよし口訣

山川に風のかけたる志からみハ
なかれもあへぬもみちなりけり

池乃ほとりにて紅葉のちる
をよめる

みつね

風ふけハおつる紅葉
風ふけも紅葉の
ちるもちらぬ影も
清き水の上なれハ
底にうつりて見
ゆるとぞ

風ふけハおつる紅葉ハ水きよミ
ちらぬかけさへそこに見えつゝ

亭子院乃御屏風の絵に川

よろこ申かみそてを　わすれんとする人乃名殘のちる
名歟こハ申とかる　まつとはるをひらくそこ
とも河乃名ハ出きる　るさとよみ世すひれれハつらつわ
かりれハ今出り
立と申りてみそわ　かる
しんさくみそてを　よろこ申かみそ御らん名歟ハ
乃さハやすめ字　申とふるともあるまし
也云經て九品乃中　これさる乃みこ此家の哥合
上字留とてこ歌
すて面白きこと
なけり　乃つる
山田もる秋乃かりほ（かりいほ）　多そね
山田もるかの庵ハかの　山田もる秋乃かりほ（かりほ）にをく露ハ
の庵と呼ぶる庵　いなおほせとりの涙成けり
の閒やなかつ乃んの哥

乃やうし稲田刈かかれもちうこゝろれならりかりそめに露ハ
山とも刈るかを刈穂のといふも今も宿とも山田をもるといふハ
仮庵（カリホ）之捨摂りハかれか乃いりとわの
わすれぬ山田をもるを
いふる種りわすれね山
田をゆるもるとて稲
衣をなる稲おほせ
露にぬれぬ月を
あしと山賊（ヤマガツ）乃胸毛（ムナゲ）の
志わざをとがめる之歌
衣ハ乎しみとも（モ）のき
る衣之又服（ブク）衣の衣
をもハ万葉にも汝教
ゆゑ此蔽衣と詠る
かれる田に相ゆるといふ

題しらず　よみ人しらず
かり出ね山田をもると山ちらへも
いかに此露にぬれぬ日ハなし
わすれる里に相ゆる山ちらの乃わすれねを
世をいとふさいりより秋きてはや（やイ）
小山より僧正遍昭とにげかゝる（松茸をとるとて）
まのわかくよりよめる
そせい法師

かれハ田にひつちの穂（ホ）
なかれハ世をあきなん
てつると読をいふ
ちハ刈田に又生るい
ねを云稆穭（ヒツチ）ともかく字也秋果（ハテ）をも飽（アク）とよみたり
紅葉はゝ袖にこき　紅葉を袖にこきいれて家づとにしてゆかん
秋ハかぎりと見ん人のためと袖にこきいれて遊すなり

紅葉ばハ袖にこきいれてもて出（いで）なん
秋ハかぎりと見ん人乃ため

此哥口訣
立田川紅葉ばながるゝ
おり出し人丸の哥之
みやまより落くる
山深き谷川よりお
ちくる水に紅葉の
ながれて色見えてそ
秋ハ限りとしると云

寛平御時ふるき哥奉れと仰
られけれハ立田河紅葉ばながる
るといふ哥をかきてそおなし
心をよめりける　興風

みやまよりおちくる水の色見てそ
秋ハかぎりと思ひしりぬる

水乃色とハみな紅
葉の色なり
としごとに紅葉ちりて
年ごとに紅葉ちりて
とながす竜田川乃
みなとや秋のとまり
なるらんと也　口訣
又夕づくよをぐらの山
になく鹿乃声乃うち
に秋のくるゝとハ冬に
成にハ鹿のなくときき
さしものこゑの絶ぬる
まで秋の暮るゝと云れ
なるらし程説　此夕月

秋乃はつる心を竜田川に思ひ
やりてよめる　つらゆき

としごとに紅葉ばながす竜田川
みなとや秋のとまりなるらん

長月乃つごもり乃日大井にて
よめる

夕づくよをぐら乃山になく鹿乃
こゑ乃うちにや秋ハくるらん

夜ハをくるといへんさめ也夕月夜ハ八月始乃月と十日あまり乃比まで

暮天乃かゝる月をさすなるへし九月晦日の月あるへからす此哥を
よそといはんとてゆふ鹿とハなけきの小倉山ハ大井川ちかくそれゆゑよむ
なり夕月夜ハ西乃山のそらり夕ぐれ見ゆるをいふ空遠山
云山乃端より出て東山より出す夕陽よりかゝりてそらり見ゆる
なり之上絃あとおとくそまうてとりなとうくなりの也（寄勘）
道しらハたつねも
ゆかんもみちはをぬさと
むけて秋の[illegible]
いぬる道を知らハ
尋ねてもゆかんと
おとをえてむけ
みさる也

おなしつこもりの日よめる

みつね

道しらハたつねもゆかんもみちはを
ぬさとたむけて秋ハいにけり

たつた川にしきをり
神な月乃時雨と縁
縁ありく竜田川より
錦を織かくるといふ
又ハ雲乃たて霧の
ぬきとするをそへハ時
雨一川をたてぬきと
以時雨ハ一方に限定
すれハたてぬきに
こひようてかつ錦を
つくハ錦織なる也
やまさとハみそきさひ
山里のさひしさハ
いはゝ春秋
ハ花紅葉の侘ありけるを冬ハ木の葉も草も埋く人目も草も

古今和歌集巻第六

冬哥

題しらす　読人しらす

たつた川にしきおりかく神な月
しくれ乃雨をたてぬきにして

冬乃哥とてよめる

源宗于朝臣

やまさとハ冬そさひしさまさりける
ひとめも草もかれぬとおもへハ

枯果（カレハテ）て常よりハ時言
こゝろかことなり矣
題しらす　読人しらす
おほそら乃月のひかり也
おほそらの月のひかりしきよけれハ
雪をしくさえたる夜
かけ見し水そまつこほりける
乃月影をうつしたる
ゆふされハころもてさむしみよしのの
水まつこほるとゝ見
衣手寒けれハ見よしのゝ　新
よしのゝやまにみ雪ふるらし
ゆふされハころもてさむし
吉野の山より雪の降やうん夕ハ秋よりさむきとしるされハ夕也空寒
云ゆふへしと云暮ハとしるされ新古今にもみえし春書とあるを此歌を
いぬる夜より降雪ハ是也　万葉三吉野八九其山古来ハとよめる也とハ
みよし野乃名ハ吉野すとつゝき又さされよりよされいまさとよむ
そうかてすとゝ云雪ハ深雪と深山とハ同し　御之雪かふるし
あらち（アラチ）山にも乃旅人かすかなるよ　兼昌乃哥之此所乃雪ハ
一年より高雪三ふかみるとは記乃心とをか

いまよりハ続きて降
いまよりハつきてふらなんわかやとの
我宿乃薄をしなひ
すゝきをしなみふる志ら雪
ふる雪乃庭の面
白妙なれハとなり又續
ふる雪ハかつけぬらしあし引乃
しくふるときハ継（ツギ）て降れ
とこつゞきて継て
やまのたきつせをとまさる也
山まてふり也　万葉　此里ハ
つきて霜や置夏の野に我見し草ハもみちたりけり　月　我宿の尾花の押
靡（ナミ）て置露に手ふれわきもこちらまくも見ん　芒を靡（ナビカ）すすゝきと
あまたハすゝきをしなひてふる也
かく雪ハかつけぬらし　降るとかつ雪ハ且（カツキエ）消ぬれハ山
声のまさりてきこゆる也　山乃瀧津瀬ハ瀧ハなぎる流と云深瀬
又瀧をしたゝせもふつハやまず雪之又月乃朝に雪積よ
雨を瀧津瀬といふ此時雨よ猶ろさしまさる袖も云ハさす
何ともしらせされハ只瀧されハとはそんハよそめかでや

ながれける「山川の水をせきかねつるよしとよめり　躬恒

この川にもみぢ葉ながる
谷川乃岩乃うへなる
ちりしもみぢ葉の流れ
くるらんとよめるは
深山乃雪げ乃水の
まさりたるなり（私注）
とぞ雪消水也雪げの
水は雪のとけんとする也
也雪氣の氣なり

この川にもみぢ葉ながる奥山乃
雪げ乃水ぞいままさるらし
ふるさとはよしのの山しちかければ
ひとひもみゆきふらぬ日はなし
わがやどは雪ふりしきて道もなし
ふみわけてとふ人しなければ

万葉「君がため山田の沢
にゑぐつむと雪げ乃水に裳のすそぬれぬ　躬恒
ふるさとはよしのの山し
吉野乃山の道き踏てあれば日一日も深く
雪のふらぬ日はなしとぞ
此古里は奈良乃京をいへり此山やわたりは　躬恒集
める所なりし又天武天皇すみ給ひし吉野の古宮といふへし

所は古里はならのみやこの事なりければ吉野をさしてよめり　是則
深雪とは大雪をいふ也
わがやどは雪ふりしきて
雪のふりしきるをいふ也雪
多くふりつもれば道
の通路なきをいふ
雪ふれば冬ごもり
雪ふれば草木の埋れて冬籠（コモリ）せるもあれば
さてまた花の咲ることを　家
木の花は雪に埋れる
をも花とは思ひまがへるや此
花見ごとの心よみ
也よみ
さる雪のところを見てよめり

冬乃歌とてよめる
紀貫之
雪ふれば冬ごもりせる草も木も
春にしられぬ花ぞさきける
志賀乃山こえにてよめる
紀秋岑
白雪乃ところもわかずふりしけば
いはほにもさく花とこそ見れ
ならの京にまかれりける時

る事方来あらね巌
にも白雪の降しけハ
花の咲を見てゆると
志賀の山越のこと也
みよしのゝ山乃志ら雪
古里乃寒く成まさ
るハ吉野山に雪の降
ばとよりしこと也
うらちかく降くる雪ハ
末乃松山を波のこす
ゝと浦辺に降る雪
ハ見ゆるとぞ松山を
波のこゆるハ譬のゑ
こそかくよめり此集
哥に見ゆれあ

やとれりける所にてよめる
坂上是則
みよしのゝ山乃志ら雪つもるらし
ふるさとさむくなりまさるなり
寛平御時きさいの宮の哥合乃
うた
藤原興風
うらちかく降くる雪ハ志ら浪乃
すゑ乃まつやまこすかとそみる
壬生忠岑
みよしのゝ山乃志ら雪ふミわけて

うせしと絶りハと云
哥のうらをとれり
みよしのゝ山の白雪を
踏分て入にし人の音
つれのなきといへるなり
なるあとゝてやとらでかひすなかり
志ら雪乃降て積れる　雪乃ふりかさなる山里をおもひやりて住人
とやおもひきゆらんとよりおひきゆるハおもひきゆる也思消と云ハ消
ハ態乃形（カタチ）もひさしく悲（ウレ）へ心あれハおもひ乃きえなんとなり
雪ふりて人もかよハね
雪ふり人もかよハぬ道
のごとく跡もなく云ひ
きゆんとも跡かたも
なくそれにかり
深くかけハ深き也

いりにし人乃おとつれもせぬ
志ら雪乃ふりて積れる山里ハ
すむひとさへやおもひきゆらん
雪乃ふるを見てよめる
凡河内躬恒
雪ふりて人もかよハぬみちなれや
あとはかもなくおもひきゆらん

[illegible]しても
あまき[illegible]
よむ[illegible]
[illegible]口訣
冬なから空より花
雲乃あなたハ春に
あるやらんとよめり
乃あなてるとも雪を
雪ともいひていへり
冬こもり思ひ付
冬こもりて花な
とおもひもよらぬに
花と見ゆるまて
木のまより雪の
ふるとし

雪乃ふりけるをよみける
　　　　　　　きよはらのふかやふ
冬なから空より花のちりくるは
雲乃あなたハ春にやあるらん
雪乃木にふりかゝれるをよ
める　　　　　つらゆき
冬こもりおもひかけぬをこのまより
花とみるまて雪そふりける
やまと乃くにゝまかれりける時
よ雪乃ふりけるをみてよめる

あさほらけとは明の
[illegible]の月のことくみゆる
まてに吉野の里
に雪の降るさまを
うすく雪の降たる詠
風也[illegible]
景のおもしろきをいふる也
定家卿古今秀歌
十首乃内也（口訣）
けぬかうへに又は降
春霞の立なは
まれにこそ見る事
雪をれは惜むの字
ふり降せよと也
梅乃花それとも見え

　　　　　　　坂上是則
あさほらけあり明乃月とみるまてに
よしのゝさとにふれるしら雪
題しらす　　よみ人しらす
けぬかうへに又もふりしけはるかすみ
たちなはみ雪まれにこそみめ
梅乃花それともみえすひさかたの
あまきる雪乃なへてふれゝは
此うたハある人乃いはくかきのもと
乃人丸かうたなり

え咲たり霧ありて小雪ハ梅花のちりひらくそれとも見えて
すゑ乃ねまて見えさも見えずそらの雪ハその花より降まじりて
いつもしらく白きさまにまぎるゝ乃清濁ハつまびらかにす
あ説也天霧（あまぎる）とハ天の気のくもりたるを云あまぎらひと云
降まじりふりて雪ハはらはらとして棚霧合（たなぎらひ）雪もふらぬか梅の花
さかぬがしろにそへてだにみむ雪ハふりつゝしかすがに我
家の園に鶯なくもうちなびき春去来れハしかすがに天雲霧合（かすみたなびき）
雪ハふりつゝ　降まじし　棚霧合ふらまし　あまぎるおなじ
まし同じ

梅乃花に雪乃ふれるをよめる

小野たかむらの朝臣（篁 大納言岑守子）

花乃色ハ雪にまじりて見えずとも
かをだににほへ人のしるべく

花乃色ハ雪にまじりて
花の香をだに匂へよ
色ハ雪にまじりて見えず
とも香をだに匂ひて
花人の知べきやう
まぎれぬ梅をしれとなり

雪乃うちの梅の花をよめる

きのつらゆき

梅乃かのふりおける雪にまがひせハ
たれかことことわきておらまし

花とそわかりハ
梅乃かのふりをける
梅の香乃ちのまゝに
こゝく雪にまがひて
誰かことごとく分別
せられん折らまし只
花ハそれなくてわか
ちやすきと也　口訣

紀とものり

雪ふれハ木ごとに花ぞ咲にける
いづれを梅とわきておらまし

雪ふれハ木ごとに花ぞ咲
雪の降けれハ枝毎に
花の咲たるごとくにてハ
いづれを梅とわきて
折るべきぞと也　木
毎といふ字を梅といふ字と見えて
かけあひて其代の人をさとせるなるべし（暇日 梅字本毎…）

やりハつもるを梅とわきてをりかねしとはけしくふりしきと
基俊ハこうり訣
わかまたぬとしを
我待ぬ年ハ齢（よはひ）
ちかくきぬれとも
まつ人ハおとつれ
ねとゝ冬草ハ枯
みつとはかれとて
何ともその
年乃おとつれり
雪もわか身もふり
まさると年ふけ
よる人ハよつき
とこわ
此歌ハ口決あり

ものへまかりける人をまちてしはす
の晦日によめる　みつね
わかまたぬとしハきぬれと冬草の
かれにし人ハおとつれもせす

年乃はてによめる
在原元方
あらたま乃とし乃をハりになることに
雪もわか身もふりまさりつゝ

寛平御時きさいの宮の歌合の

雪ふりてとしの暮ぬる
雪ふりて年暮
ぬる時にこそ松ハときは
色にかはらぬ影を見
せす見えしかなる
みさをのほとも見れ
又ゆるとし貞松ハ
歳寒（サムクシテ）忠臣見（アラハル）
國危といふ心なり
きのふといひけふと
いふ今日と暮して
を飛鳥川によせて
流れてはやき月
日もくれゆくと也
一年を云る心明

うた　よみ人しらす
雪ふりてとし乃暮ぬる時にこそ
つひにもみちぬ松も見えけれ

年乃はてによめる　はるみちのつらき
きのふといひけふとくらしてあすか河
なかれてはやき月日なりけり

哥たてまつれとおほせられし時に
よみてたてまつれる
紀つらゆき

日三日よりはしまする　ゆく年乃句くも作るにゆゑすかるゆゑ
香好みらところやます　見るうけさへりされねともおもしへハ
らのまさして短題
あるべき

ゆく年乃句くも作る　残り見ゆる我影さへせ不暮あるとも
暮ゆく年乃句くも作るやりとしをしゆくやさる暮ある年の句
く作るなのまさすとミまさすかくこハ真澄鏡を見るやうすす
残ともにりさ年乃暮暮りよせてけり